

児童向けバイオリン体験教室の実践報告  
— 知の拠点としての大学における音楽の学習機会提供の可能性 —  
Report on Practical Experience of Children's Violin Trial Lessons:  
— Potential for Providing Learning Opportunities for Music  
at Universities as Centers of Knowledge —

森野 かおり  
Morino Kaori

## 0. 問題の所在

持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）は、近年の日本社会において最も注目される取り組みの一つである。この取り組みの中には、教育機会の不均衡を是正する動きも含まれる。例えば近年では、自治体による無料塾の運営が積極的に行われ、これらの取り組みはすでに多くの成果をあげ始めている。

これに対し、音楽分野では、無料の音楽鑑賞会や体験講座といった催しは充実する一方で、楽器演奏や声楽、作曲等の学習に対する個別支援はほとんど行われていない。特に、西洋音楽（以下、「クラシック音楽」）は、歴史的に見ても日本では敷居の高い音楽として扱われることが多く、その教育機会はむしろ不均衡を強めてきた。例えば、日本の国立大学で唯一音楽学部を有する東京藝術大学では、早期教育プロジェクトの取り組みが行われているが、これは、すでに充実した音楽の学習環境に身を置く子どもたちの中から才能ある人材を発見し、音楽家の道に導くプロジェクトであり、音楽の学習機会そのものを失っている子どもたちに目を向けた取り組みは、未だ積極性を欠いている。しかしながら、クラシック音楽の学習の中でも特に器楽分野は、楽器の購入や楽器の維持費といった諸経費が嵩むほか、楽器の練習場所の確保など、教育機会の均等化のための課題が山積しているため、実現可能で持続可能な音楽教育システムが見出せずにいたことは、容易に想像できる。

そもそも、明治政府の欧化政策下において、クラシック音楽の普及は最優先課題であった（田中 2022）。明治期に小・中学校の音楽教育にクラシック音楽が導入されて以降、クラシック音楽の文化は順調に裾野を広げてきた。特に戦後においては、音楽産業の発達により音楽大学や音楽教室、クラシック音楽のコンサートの増加など、音楽を生業とする音楽家の増加とお稽古事としてのアマチュア層の増加が確認されている（唐津 2022 など）。その一方で、先述の通り、近年の日本ではクラシック音楽が敷居の高い音楽として認知されていることも否めない。このことは、クラシック音楽の文化を継承する演奏家自身の言語録からも確認することができる（清塚 2013）。なぜこのような状況が生起しているのだろうか。

この原因の一つとして、クラシック音楽が子女のお稽古事として習学できる限られた人々によって継承されてきた（歌川, 2015）という歴史的な背景が挙げられる。すなわち日本においては、クラ

シック音楽そのものが限られた市民層に親しまれてきた。その結果、クラシック音楽の継承を担う人材は、少子化、教育格差など、あらゆる社会状況と相まって、減少傾向に拍車がかかっているのである。片岡(2022)は、日本人が文化的に発展するための文化振興策として何を望んでいるかについて定量調査を実施し、その結果、クラシック音楽と西洋美術を選択した比率が最も少なく、日本の伝統的文化や日本固有の文化への回帰とその発展に期待する回答が最も高かったことを明らかにした。片岡はこの調査において、特に若者の西洋芸術文化離れが拡大していることを指摘しており、若者にとっての西洋芸術文化は、親しみにくい、なじみがないという表現で示されている。

このような状況を打開するため、近年では演奏家によるアウトリーチ活動を中心に、オーケストラやコンサートホールが主催する楽器体験会など、児童・生徒に向けたクラシック音楽の裾野を広げるプロジェクトが多く実施されている。特にクラシック音楽の楽器学習の提供や促進については、アウトリーチコンサートや音楽ワークショップの一環として実施されることが多く、これらに携わる音楽家を束ねる団体は多く存在し、その教育内容に関する研究も多く存在する。しかし上記の取り組みは、学校現場から依頼を受け成立するものであり、また持続的に行われた場合にもせいぜい年に1回ないし2回が限度であることが多い。一方、各自治体のコンサートホール等において所属オーケストラの団員らによって実施される楽器体験では、自ら体験したいと申し出た場合には何度でも申し込むことが可能である。しかしこの催しは多くの子どもが参加するイベントとして企画されることが多く、ごく短い時間で楽器に触れる程度の内容で実施されることが多いという課題がある。この点、ドイツ・ハンブルク州の基礎学校 (Grundschule) に導入されている器楽教育プロジェクト “Jedem Kind ein Instrument (どの子どもたちにも一つの楽器を)” は、学校教育の枠組みで実施されており、その成果としては教育環境に恵まれない、あるいは経済的に困難な家庭の子どもたちにおいて効果が高いことが示されている (藤山 2020)。しかし現在の日本の教育環境において、楽器の提供、授業時間数の制限等、実現性は非常に低いことが予測される。

では持続的な演奏学習をサポートする取り組みは、不可能なのであろうか。この点、近年ではエル・システマ (国立財団ベネズエラ児童青少年オーケストラ・システム) の活動が際立つ。エル・システマは、とくに貧困層に対する音楽教育のシステムを構築し、多くの指揮者、演奏家を輩出してきた (太田 2016)。エル・システマの取り組みは全世界へと広まり、日本では2012年に福島県相馬市において「音楽による生きる力をはぐくむ事業」が開始され、これまでオーケストラ楽器に触れたことのない子どもたちを中心とした音楽教育支援をスタートさせているのである。このほかの日本国内の活動としては、アーツプレッドがある。アーツプレッドは、2014年から現在まで、芸術文化の一極集中を是正するため、北海道を中心に、安価な授業料で弦楽器の音楽教室を実施している<sup>1</sup>。このように、日本においても演奏学習の機会均等を主眼に捉えた活動が行われつつある中、本研究の目的は、知の拠点としての大学における音楽の学習機会提供の可能性を考察することである。本研究

---

<sup>1</sup> 弦楽器の音楽教室に関しては、名称を「とちかち kids オーケストラ」に改名し、現在は独立団体として活動している。

では、横浜国立大学が横浜市保土ヶ谷区と連携して実施している「がやっこ夏休み教室」において、筆者が 2023 年度に実施した「バイオリン体験教室」の実践報告をもとに、本講座の意義と課題を明らかにし、知の拠点としての大学において音楽の学習機会の提供はいかにして実現することができるのかについて、考察を行う。

## 1. がやっこ夏休み教室の概要

横浜国立大学教育学部では、2005 年度より保土ヶ谷区との連携で保土ヶ谷区内に在住・在学の小・中学生対象の「がやっこ科学教室」を開催してきた。2020 年度からは、名称を一新し「がやっこ夏休み教室」として、幅広い分野の講座を募集している。というのも、これまでは一般的に「科学」という言葉から連想されるような、理科系・実験系の講座がほとんどであった。一方で、本事業の目的は、地域と連携し、児童・生徒に学校ではあまり機会がないであろう教科書や指導書以外の学びを提供するところにある。そこで現在では「広い意味での科学」、すなわち社会学や芸術学、言語学や心理学など、教育学部に所属する教員の専門分野を中心とした幅広い内容の講座が開設されている。参加希望者は、小学校で配布された参加者募集のチラシをもとに、電子申請システムで申し込む。参加費は無料である。

## 2. 「バイオリン体験教室」の概要

◎ 2023 年 8 月 10 日（木）10:00-12:00

小学校 1, 2 年生対象 定員 10 名

◎ 2023 年 8 月 10 日（木）13:30-15:30

小学校 3, 4 年生対象 定員 10 名

場所：横浜国立大学教育学部，教育棟 5 号館（音楽棟）4 1 1 室

本講座では、楽器調達の都合上、小学校中学年までの募集に限定し、かつ、定員を 10 名に設定した。その結果、当日の参加人数は以下の通りであった。

- ・小学校 1, 2 年生対象 9 名(保護者 9 名)
- ・小学校 3, 4 年生対象 10 名（保護者 9 名，小学校 5 年生 1 名見学）

講師は、バイオリニストの南紫音氏と、筆者（ピアニスト，森野かおり）である。また、体験時には可能な限り細かな指導を行うため、アシスタント（教育学部 4 年生の学生）を 2 名配置した。

## 3. 「バイオリン体験教室」の内容

本講座の内容は、学年に関係なく、次の（1）（2）2つの局面から構成されている。

### （1）講師演奏

筆者が、本講座の趣旨と流れを説明したのち、バイオリニストの南紫音氏が、バイオリンの楽器や

音色の説明とともに、クラシック音楽の演奏や意義について自身の演奏を交えつつ説明した。

#### 1 曲目：F.クライスラー 《シンコペーション》

演奏後、バイオリンが擦弦楽器であることをピアノと比較しつつ説明した。また、指で弦を押さえることによって、音高を変えていること、ピッツィカートのように弦をはじく奏法があるなど、楽曲を交えながらバイオリンの演奏方法を説明した。

#### 2 曲目：C.ドビュッシー 《亜麻色の髪の乙女》

演奏後、児童が普段耳にする楽曲を南氏が質問したところ、ポップスなどの歌詞のある楽曲であることがわかった。一方で、クラシック音楽の中でもとくに器楽曲は、歌詞がないことに特徴があることを児童とともに確認した。その上で、クラシック音楽の器楽曲は歌詞がないために、一般的にどのように楽しめばいいかわからなくなる



傾向があることを南氏は指摘した。《亜麻色の髪の乙女》では、楽曲に詩が添えられており、南氏はその詩の一部を読んだ上で、楽曲からどのようなイメージを受けたかを質問した。児童は、それぞれのイメージを発表したが、詩のように聞き取れなかった部分があったことも同時に明かした。これに対し南氏は、実際の詩で描かれた情景と自分の感じた情景が一致することが正解ではなく、自分の感じた情景を大切にしてほしいとの言葉がけを行った。

#### 3 曲目：B.バルトーク 《ルーマニア舞曲》

演奏後の質疑応答では、「ビブラートやピッツィカートといったバイオリン特有の演奏方法」や「バイオリンの構造の詳細について」、「器楽曲がなぜ誕生したのか」といった南氏の解説に関する質問が各回ともになされた。南氏は一人ずつの意見に対して回答を丁寧に行った。とくに演奏法については、この後の体験会において実際に試することができる、との言葉がけを行った。その結果、児童は今後の活動がより楽しみになったことを明かした。

### (2) バイオリン体験活動

本講座では、保護者に対して児童の身長に関する事前アンケートを行っていたため、各児童に合った大きさの楽器を1艇ずつ提供することができた。

以下の体験活動は、南氏の指導を中心に、教員一名（筆者）とサポート2名で行った。

#### ① バイオリン本体の持ち方の説明

まずは左手でバイオリン本体を持ち、下部を顎から一直線に下ろし、肩に乗せるという流れで作業を行った。何度か同じ流れ作業を行い、児童が慣れてきたところで顎と肩で楽器を挟み、教員のサポートのもと、手を離して楽器を固定させる作業



を試みた。学年を問わず、ほとんどの児童がこの作業をこなしていた。

## ② 弓の持ち方の説明

次に、弓の持ち方の説明を行った。弓の持ち方は難易度が高いため、南氏が各児童を丁寧に指導し、児童達はそれぞれに持ち方を習得していった。まずは「狐の手」を作り、弓を挟む作業を行った（写真Ⅰ）。次に、弓を全ての指でしっかり持ち（写真Ⅱ）、簡単なエクササイズを行った（写真Ⅲ）。

（写真Ⅰ）



（写真Ⅱ）



（写真Ⅲ）



## ③ 音を出す活動

次に、バイオリン本体と弓を持ち、弦の位置は指定せずに音を出すという活動を行った。児童の様子から、音が鳴ることの喜びを噛み締めているように感じた。低学年では、楽器を持つことによって疲労が溜まる傾向にあったため、適宜休憩をとりつつ活動を行った。一方中学年では、休憩を設定したにもかかわらず、休憩中に楽器を練習したいとの申し出があり、結局全員が楽器を持ちだして練習していたため、次のステップに進むこととなった。

## ④ A線とE線を弾く練習：《ちょうちょう》の合奏

次に、特定の弦に弓を当て、音を鳴らす練習を行った。まずはE線を鳴らし、次にA線に移行した。とくにA線は左右にD線、E線があるため、周辺の弦を弾いたり、音が鳴らしにくい傾向にあるが、児童は集中して自分の弓がA線にあたっているかを確認していた。学年を問わず、児童の活動が予想



以上に進んだため、比較的早い段階で《ちょうちょう》の演奏を完成させることができた。そのため、急遽H音の（A線を一本指でおさえる）練習を追加した。低学年クラスでは、途中で疲れて休憩をする児童もいたが、中学年では全員がH音を習得し、再度《ちょうちょう》の合奏を完成させることができた。

## 4. 本講座の意義と課題：アンケート調査の結果から

本項では、大学が実施しているアンケートと筆者が作成したアンケート、合計2つのアンケート調

査の結果を考察する。どちらも基本的には保護者に向けたアンケートであるが、項目によっては受講者（児童）が記述している場合があった。

#### （１）大学が実施したアンケートの結果

大学が実施したアンケートでは、Q3.「先生の説明はわかりやすかったですか?」、Q.5「つぎも参加したいと思いますか?」の項目において、19名中全員が「1.とてもそう思う」を選択している。特に、Q.3においては、本講座がグループ活動で実施されていたにもかかわらず、個別の指導が適宜あったことへの感謝の念が多く述べられていた。この回答から、参加者の興味や関心は、単に楽器に触れるという経験だけでなく、バイオリン演奏の技術と知識の学習に向いていることがうかがえる。

また、Q.7「今後やってもらいたいテーマはありますか?」の問いに対しては、以下のような回答があった（全回答記載）。

- ・また楽器シリーズをやってもらいたいです。
- ・マリンバ
- ・フルートのことを教えてもらいたいです。
- ・ギターをひいてみたい。
- ・いろんながっきにさわる
- ・管楽器の体験、クラシックを聴く
- ・横浜フィールドワーク、英語学習
- ・親子でできるもの
- ・色々な楽器の体験
- ・今回のように触って体験したいです。
- ・音楽、クッキング、科学実験、色々な体験教室など、キャンプ、イングリッシュキャンプ

この回答結果から、音楽に関する演奏学習を多く希望していることがうかがえる。そもそも、本講座を選択している児童や保護者は、音楽や楽器に興味がある可能性が高い。なぜなら、筆者が独自に行ったアンケート調査のQ.3「音楽関係の習い事をしていますか?」では、10名が「はい」、9名が「いいえ」であったが、Q.4「今後、他の楽器も習いたいですか?」では、10名が「はい」、6名が「いいえ」、3名が未回答であったからである。そのため、バイオリンだけでなく、他の楽器に興味を示すことは自然な流れであるとも言える。一方、筆者独自に行ったアンケート調査のQ.4において、「いいえ」を選択した保護者の1名は、「興味はあるがマンション住まいで家で練習が難しい、が習いたい」と記入していた。楽器学習では、教員からの指導を受けるレッスン時だけでなく、家庭での演奏学習も余儀なくされる。このような場合、楽器購入だけでなく、音漏れなど住環境によっては演奏学習の継続が叶わない児童が存在することも、考慮に入れなければならないことがわかった。

## (2) 筆者が作成したアンケートの結果

本調査では、バイオリンのレッスンに対する保護者の捉え方を明らかにするため、Q.6「どういう形態でレッスンを受けたいですか？」Q.7「レッスン料は月額いくらぐらいを希望しますか？」の設問をもうけた。結果、10名の保護者から以下の回答があった。

Q.6：個別4名，団体2名，両方4名

Q.7

- ・ 3000円～4000円それより安ければきつとすぐ習うかも
- ・ 5000円（2名）
- ・ 5000円～6000円
- ・ 5000円～8000円
- ・ 1万円（3名）
- ・ 1万5000円
- ・ 1万5000円～2万5000円

本講座が合奏での演奏を主としていたため、団体でのレッスン希望が多いことが推測されたが、結果、個別指導を希望する保護者が多かった。また、個別と団体どちらも希望するという場合にも、個別での指導を主とする内容を望む声が多かった。

レッスン料については、平均的な音楽教室の金額よりも高い値段を選択しているようにうかがえる。これは、マスメディア等で紹介されている内容から、バイオリンという楽器の価格や維持費が高額な印象に捉えられているのではないかと推測する。この点、本講座は無料であり、大学が所有する教室、楽器を活用できるため、意義があると考えられる。一方で、講座終了後、児童がバイオリンを習いたいと言っているのだがいくらほどかかるのか、という質問があった。その際、バイオリンのおおよその値段を説明すると、すぐに学習を開始するという反応には至らなかった。前述の課題と同様に、本講座が、バイオリン演奏への興味の入り口を担うことができているとすれば、今後どのような形で継続的な学習をサポートできるのかを考えていかなければならない。

最後に、筆者が作成したアンケートの中でも、Q.2「お子さんの人生において、どんなふうに音楽と付き合っていてほしいですか？」に対しては、以下のような回答があった（全回答記載）。本研究では、クラシック音楽の裾野を広げる活動の観点から考察を試みてきたが、それは、時として、クラシック音楽に携わる当事者からの強制的な意味合いに捉えられる場合がある。しかし一方で、どのような音楽ジャンルであっても、人生において音楽を「楽しむ」ものであってほしいという保護者の意図が感じられる記述であった。その意味において、クラシック音楽の魅力を知る者が、その魅力とは如何なるものなのかを発信し続けることは重要であると考えられる。また、魅力を伝えるだけでなく、その魅力を知り、興味を持つ全ての人々に教育機会が開かれ、演奏学習もまた、持続可能な学習の一つとしていかに確立していけばよいか、本稿を通して改めて問いかけたいと考える。

- ・ 日常の一部として楽しんでほしい
- ・ 楽しく、いろんな楽器に興味を持ってほしい
- ・ 極めたりしなくてもいいけど、音楽を楽しんだりその中で好きな音色など見つけていってくれたらいいなと思う
- ・ 楽しんで音楽と付き合ってほしい
- ・ 楽しく付き合ってほしいです。
- ・ 楽しく
- ・ 音楽の楽しさ、素晴らしさや習得することの大変さを知り、尊敬の念を持ちつつ、音楽を楽しんでほしいです。
- ・ 好きな楽器と出会って、細く長く続けられるといいなと思っている
- ・ 何か好きな楽器も弾けるようになったら嬉しいです。趣味の一つとして音楽を楽しめたらいいなと思います。
- ・ 音を楽しんでもらえれば
- ・ 楽器を弾いて演奏などを楽しんでほしい
- ・ 人生の楽しみを深めてほしい
- ・ 自己表現の一つとして付き合ってほしい
- ・ 楽しく音楽と関わる
- ・ 楽しく演奏してほしい
- ・ 教養、趣味
- ・ 楽しめるものであってほしい

## 5. 知の拠点としての大学における音楽の学習機会提供の可能性

最後に、第4節の本講座の意義と課題から、知の拠点としての大学において音楽の学習機会の提供はいかにして実現することができるのかについて、考察を行う。本講座の意義は、知の拠点としての大学の活用や充実したバイオリンの学習提供という点において認められたが、課題については、持続可能な演奏学習の提供と音楽に興味がある児童・生徒に偏らない学習機会の提供にあった。

そもそも高等教育機関における大学のミッションは、教育、研究、社会貢献にある。藤埴（2021）は、学外組織との連携の意義をナレッジマネジメントの観点から、教育は知識の普及、研究は知識の創造、社会貢献は知識の活用という相互関係で成り立っていることを明らかにしている。大学における社会貢献については、既に1947年の学校教育法において、大学における公開講座、大学施設の開放、夜間部の設置、通信教育が制度化されるなど、改革が求められてきた。1996年には生涯学習審議会答申の「地域における生涯学習機会の充実方策について」において、公開講座の質的充実や拡充が求められている。このような政策によって、高等教育機関における知識の活用は、知識の普及を求



める人たち、すなわち学びたいという意志のある人たちに提供されてきた。この点においては、本講座も同様の位置づけにある。しかし一方でESDの観点、すなわち学習機会の不均衡を是正するという視点においては、学習の意志を持つきっかけさえない状況にある場合、この政策には限界がある。そこで学習機会の不均衡を是正するための新たな視点として、本研究では今後、2000年以降全国の大学で普及してきたサービスラーニングに着目したい。サービスラーニングとは、学生がボランティア活動などコミュニティサービスに積極的に参加し、その社会参画の経験を学習の資源として正課の科目に活用する試みである。この試みは、2012年に文科省が「大学改革実行プラン」において地域社会におけるCOC（center of community）となり「地域再生・活性化の核となる大学」という位置付けが言及されたことにより、大学の地域貢献という視点においてさらに加速している。本講座の課題である、持続可能な演奏学習の提供と音楽に興味がある児童・生徒に偏らない学習機会の提供という視点においては、神奈川県で唯一音楽が学べる国立大学として、音楽の知識を創造する教員がその知識を学生に普及し、音楽の知識体系を共有した教員と学生が社会貢献に関わることで、オンキャンパスとオフキャンパスの往復によって教育、研究、社会貢献を同時に進行させることができ、学習機会提供の可能性が広がるのではないだろうか。よって今後、演奏学習の機会提供に関する活動をいかに学習の資源として正課の科目に活用するかについて考察することは、本研究に課された課題の一つであると思われる。

【付記】本研究はJSPS 科研費 23K00211 の助成を受けたものです。

#### 【参考文献】

- 歌川光一（2015）「二〇世紀初頭日本における「女子にふさわしい楽器」のイメージ—女性雑誌付録 絵双六を中心に—」『東洋音楽研究』80巻,pp.41-59.
- 太田和敬（2016）「エル・システマの研究（上）」『人間科学研究』第36巻, pp.1-27.
- 片岡栄美（2022）「人々が期待する文化振興策のジャンル間比較：全国調査データを中心に」『駒沢社会学研究:文学部社会学科研究報告』59巻,pp.29-57.
- 唐津美和（2022）「生涯音楽学習の視点から見たピアノ学習の状況：1998年と2021年の調査結果の比較を通して」『音楽研究:大学院研究年報』34巻,pp.277-293.
- 清塚信也（2013）「清塚信也氏によるピアノが面白くなるトーク&ライブ！」『文化情報学』第9巻1号,pp.55-61.
- 田中健次（2022）「図解近代日本音楽史—唱歌、校歌、応援歌から歌謡曲まで—」東京堂出版.
- 藤山あやか（2020）「ドイツの音楽教育における多文化共生に向けた取組み—ハンブルク州 Jedem Kind ein Instrument プロジェクトの事例から—」『BULLETIN OF SHIGA BUNKYO JUNIOR COLLEGE』第22巻, pp.29-38.
- 藤埴智一（2021）「IV—10 教育における社会連携・産学連携」『よくわかる高等教育論』pp.52-53. ミルヴァ書房.